

## 「久坂玄瑞と月性」の関わり

久坂玄瑞は、萩で藩医の家に生まれ、15歳にして両親と兄玄機を立て続けに亡くしました。藩医たる久坂家の家督を継いだ玄瑞でありましたが、胸中は尊敬する兄玄機の姿とその兄の思想が根底にあり、攘夷に向って進んでいくこととなります。

若くして家族を失った玄瑞は、兄玄機の親友であった月性を大変慕っていました。月性は、孤独になった玄瑞を柳井市遠崎にある月性の私塾「時習館（清狂草堂）」に招き寄せて、塾生と一緒に学ばせました。

玄瑞の詩心は月性を師事することによって一段と伸びたようです。月性はよく旅に出かけ、塾を空けることも多く、玄瑞が月性のもとにいたのは、短期間ではありましたが、文通により詩の添削などを求めているようです。そして、松陰が金子重輔と共に下田の米艦船に乗り込み、海外に行く企てを図って投獄された下田事件のその年に、玄瑞は月性から天下の形勢を聞くと同時に、松陰の存在を知らされ、会って教えを乞うように勧められています。

その後、玄瑞は九州へ遊学。口羽徳輔の薦めで熊本に行き、松陰の親友でもある軍学者の宮部鼎蔵に会い、宮部から松陰の存在を改めて知らされることとなります。萩に帰着後、早速松陰と文通を始め、松下村塾の塾生となりますが、その根底には遠崎の地での月性の推挙による松陰の存在を聞かされていたことが基になったようです。

玄瑞が松陰の門下生となり18歳になった頃、松陰から末妹の「文」に縁談を持ちかけられています。松陰は、文が末妹ということで特別に可愛がっており、優秀な血脈を結びたいという思いも強く、実は、初めに桂小五郎（20歳）に白羽の矢を立てていますが、小五郎は剣術修行で江戸に行き、文との縁談について断りを入れています。後に玄瑞が現れ、松陰は今度は玄瑞と文の結婚を決めるため、中谷正亮を通じて、縁談を持ちかけ、玄瑞は中谷の強い勧めでこの縁談を受けることになりました。

月性は二人の婚儀を知り、安政4年12月24日付で松陰へ祝いの手紙を届けています。

「ご令妹を久坂生へ御めあわせの由、御好配を得られ大慶に存じます。たしかご令妹は先年、桂生に勧められたことがあったと記憶するが、小五郎は壮士であっても、読書の力と憤夷の志は、久坂生が遙かに勝るべく、まことに佳き婿であります云々」

これは、玄瑞に縁談を持ちかける前に、小五郎に勧めていたということを知っていて、小五郎より玄瑞の方が良い婿だと述べており、月性と松陰の関係の深さがよく分かります。

月性にとって二人は、我が弟と妹という思いが強かったようで、二人のことを大変気にかけていたことがよく伺える手紙です。

安政5年1月末、玄瑞は江戸への遊学を許されます。防府から柳井市阿月、そして、遠崎にも月性に会いに立ち寄っています。この旅では、多くの志士と出会うため、松陰や月性の紹介状も携えて旅立っています。旅先の酒席では、師である月性の「壁に題す」を披露し、人々の心を充たし、胸を熱くさせていました。

月性は、安政5年5月、法談に向かう船の中で発病、帰寺後没。

月性の死後、野山獄に投獄されていた松陰は、安政の大獄で東送の命（江戸に送檻）を受けることとなります。その出発までの約10日間で、松浦松洞が松陰の肖像を8枚描き、松陰自らが肖像画の横に

自賛、そのあと玄瑞が月性の肖像を描くことを松洞に頼み、松陰が月性に対する賛を書いています。肖像画を描いた松洞は、月性に幾度も会ったことがあり、剣をかざし舞う姿、その月性が持つ長剣は、玄瑞の兄玄機のものとしてされていました。

松陰が筆を入れた賛には、「実甫（玄瑞）、清狂の像を出し、文を余に求む…ああ清狂死せり。回（二十一回猛士、松陰）もまた将に去らんとす。一幅三人、死別の感深し…」

松陰が、先に死んだ清狂の画像の横に、死後の自分の像を並べ、さらに玄機の遺像を思い浮かべていたのではないのでしょうか。

以前、この肖像画は「狂僧西錫ノ図」として存在していましたが、現在は所蔵先が不明であり、見る事ができません。

月性の死後、松陰は、月性をよく知る親友で遺稿を作成し、世に広めたいと発案します。そのあとがきは、月性を敬愛してやまない玄瑞に託され、玄瑞が月性の死に対し、深く悲しみ、兄玄機同様にいかに尊敬し慕っていたかということが読み取れる素晴らしい跋文となっています。

その数日後、松陰は国事犯として江戸へ送檻、安政6年10月、江戸で処刑されました。享年30歳でした。

参考図書（順不同）

「吉田松陰」海原徹著（ミネルヴァ書房）

「吉田松陰撰集」松風会（松風会）

「留魂録の世界」古川薫著（山口新聞社）

「吉田松陰 誇りを持って生きる！」

森友幸照著（(株)すばる舎）

「吉田松陰」高橋文博著（(株)清水書院）

「花冠の志士」古川薫著（(株)文藝春秋）

@kawa